

今年度の関東歴史教育研究協議会は、千葉県立東葛飾高等学校にて10月18日に開催された。神奈川より澤野理事長と共に参加したが、以下簡単に大会の内容と所感を報告させて頂きたい。

まず、千葉県高等学校教育研究会部会長の県立清水高等学校校長・土屋徳郎先生より開会の言葉があり、続いて、会場校校長・平賀洋一先生、千葉県教育庁教育振興部学習指導課・織田克彦先生のご挨拶の後、都留文科大学教養学部教授・鈴木哲雄先生より「千葉氏と酒呑童子絵巻」との題目にて講演があった。鈴木先生は千葉で教鞭をとられ、多くの業績がある中世史家で、今回は近著の『酒呑童子絵巻の謎－「大江山絵詞」と坂東武士』（岩波書店 2019）の内容に拠ったものである。南北朝期に成立したとされる最古の酒呑童子物語である『大江山絵詞』の成立から中世の坂東武士、具体的には千葉氏などを例に坂東武士の意識や武士論を展開する。先生の近著および所論は武士論の第一人者である高橋昌明氏への批判であり、詳細内容は前掲著書を参照されたいが、絵詞成立は中世千葉氏の制作によるもので、坂東武士である酒呑童子退治の頼光四天王から「都の武士」の源家棟梁・源頼光への関連と武士論への言及など、大変に興味深い内容であった。授業との関連で述べると、武士についての生徒の興味関心に比して、その発生などの教科書や副教材の記述内容は概ね不十分であり、職能論などの専門研究の成果が十分に反映されていないように思われる。武士の歴史的役割の大きさに比して扱いが軽く、教材内容を豊富にする意味でも武士論などが取り上げる良い筈である。また、「地域の教材化」の観点より、武士の発生に重要な意義を持つ坂東・東国＝関東地方としては、武士の発生や東国政権の問題はもっと授業で扱われるべき問題であろう。例えば筆者は2013年全歴研神奈川大会で「古代から中世の横浜を学ぶ」と題し、「牧」の存在や武士団の起源などを取り上げた拙い授業を提案させて頂いたが、講演内容の様な豊かな史的内容が存在するのであるから、さらなる教材化とそれらを生かした優れた授業実践の登場が待たれる。そして、中世・鎌倉研究の問題として「吾妻鏡史観」の問題にも言及されておられたが、史料重視の学習がますます問われる中、そろそろ史料批判の問題として教科書頻出の基本史料・『吾妻鏡』の性格と限界、またそれに基づく鎌倉時代像が再検討されても然るべきであると思われる。

次に、昼食・休憩を挟み、授業実践報告①として、県立柏高等学校・本城愛子先生より「3つの三美神から「ルネサンス」を読み解こう」との題目で発表が行われた。世界史A授業でのポピュラーなルネサンス三美神の図版の比較解説によるルネサンス理解の深化を目指した内容で、手堅くコンパクトな方法が有効的な報告であった。時代的制約があるが「12世紀ルネサンス」の内容も加わると、さらに根本的な理解に幅が出てくるように思われた。次に、授業実践報告②として、県立佐原高等学校・矢内遼先生より「基地から見る戦後史－占領政策の転換」との題目で発表が行われた。日本史A授業での戦後占領期における政策転換を学ぶ内容で、中学校教科書と年表の活用、地域教材－千葉県内基地の歴史的変遷と反対運動への注目など豊富な内容を示した報告である。本県神奈川も沖縄に次ぐ「基地県」であるが、前述の「地域の教材化」の観点からも近代史での基地問題の扱いは不可欠であり、まさに歴史との正対が問われる場面である。当然、教材化には困難も伴うが、特に若い先生方には臆せずには是非取り組んで頂きたい実践であり、その意味でも好感の持てる報告であった。

紙幅が不足してきたが午後の巡検では、柏市花野井の国指定重要文化財・旧吉田家住宅歴史公園（住宅8棟）を見学した。江戸後期醤油醸造業で高名な豪農旧宅で、懇切な案内を受け有益であった。